

保護者のみなさまへ

コレだけは 知っておきたい! 教育NEWS

いま
どき

(目指す学力は?)

大学入試では、推薦入試の入学者が年々増える傾向に!

● 国立大学

2000年

(入学者計 102,154人)

AO入試

0.3%

318人

推薦入試

10.2%

10,392人

一般入試

88.3%

90,182人



2020年

(入学者計 97,158人)

AO入試

4.2%

4,106人

推薦入試

12.4%

12,089人

一般入試

83.0%

80,599人



● 私立大学

2000年

(入学者計 468,260人)

AO入試

1.7%

7,773人



2020年

(入学者計 493,321人)

AO入試

12.1%

59,846人

推薦入試

44.4%

218,889人

一般入試

43.3%

213,422人

[文部科学省大学入試室調べのデータを基に作成]

小・中学生のうちから 知識をベースに探究する学びが大切

加速度的に変化する時代 必要なのは未知を探求する力

2020年度から、大学入試改革、新学習指導要領の実施などにより教育は変化しています。昨年から小学校、今年からは中学校で通知表の評価の観点も変わりました。今年4月にはGIGAスクール構想がスタート。全国の公立小中の子どもたちが、タブレットやPCを手にしました。目まぐるしく教育が変わるので、どんな学力をわが子に身につけさせねばよいのでしょうか。石川一郎さんと聞きました。

以前私はこの情報紙で、「これから求められる学力は未知の問題に挑む思考力・判断力・表現力」とお伝えしました。現に世の中は、私たちの想像をはるかに超えるスピードで変化しています。

一例を挙げると、医療や生命科学にかかる遺伝子情報の解析は、2000年には100億円ものコストがかかつっていましたが、2030年には限りなくゼロに近づくといわれています。あと9年で誰もが、地球上のあらゆる生物の遺伝子情報を手にすることができるかも知れないのです。私たちとは今、量子コンピュータやAIなどのテクノロジーの進化によって、1年後ですら予測が難しい未知の時代を生きています。極端なことを言えば、この先、昨日の常識が今日は通用しない、ということも起り得ます。ではないといい、わが子にどんな力をつけねばいいのか、どこを目指せばいいのか、方々が慕れてしまいしね。そこで、ひとつ目のヒントになるのが大学入試です。2020年度からの大学入試改革では、「総合型選抜」に焦点を当ててみましょう。

センター試験廃止・大学入学共通テストに、一般入試→一般選抜・AO入試・総合型選抜、推薦入試・学校推薦型選抜に、の2つの変化が挙げられます。この中の「総合型選抜」は、かつての一芸入試と間違え

【慶應大・SFCの例】総合政策学部と環境情報学部のAO入試では、大学入学以前に人生を賭けて挑むに値する目標を見出し、それに向けて努力を積み重ね、すでに実績がある人を求めています。やるゆる芸人試ではあります。大学の部活動で活躍してもらいためだけのスポーツ推薦でもありません。アイディアコンテストでもありません。自分自身の魅力が伝わるよう、自らの言葉、画像、動画等で自己アピールをしてください。また、AO入試のための特別な対策は求めません。みなさんの大切な個性を表現してください。

総合型選抜

調査書などの書類審査を通して、面接や小論文、学力テスト、プレゼンテーションなどの2次試験がある。選抜方法は大学によってさまざま。大学入学共通テストのスコアが必要の場合も、高校からの推薦は不要。高3の9月から出願がスタート。

学校推薦型選抜

公募制と指定校制があり、公募制は出願条件を満たしていれば誰でも出願できる。指定校制は、大学が指定した高校の生徒にのみ出願資格がある。いずれも、高校からの推薦が必要。学業の成績、部活動の実績、学校外での活動などが評価される。

【総合型選抜】を自指しながら、「一般選抜」に対応できる力を身につけたい!「学校推薦型選抜」は最後の砦と考えて!

お話をくださいましたのは……



石川一郎さん

1962年東京都生まれ。早稲田大学教育学部社会学科卒業。歴史専修卒業。30年にわたった中高で教鞭をとり、かえつ有明中・高等学校校長、香里ヌヴェール学院院長を務めたあと現職。著書に「2020年からの新しい「教育リスク」を考える」(ともにSB選書)など。

また、2020年度の東京工業大学の総合型選抜の募集要項には、入学希望者に「誰も見たことのない未来をつくりだせ」という見出で、「①高い志を持ってほしい」「②多角的な視点を持つてほしい」というメッセージがあります。そして、求める学生像として、次のように記しています。

【東大・工学院の例】機械系・システム制御系、電気電子系・情報通信系、経営工学系の学問分野

に強い興味を抱き、人類と社会の持続的発展に貢献しようと高い志と理系科目を中心に十分な基礎学力を有する者。とりわけ総合型選抜では、柔軟な発想力と、その発想を他者と共に持てる説明力および他の者の発想を理解できる能力に秀でた素質が認められる者を強く求めます。

「問題解決的な学習が発展的に繰り返され、物事の本質を自己との関わりで探し見極めようとする一連の知的営み」を「探究」と呼ぶのです。そのプロセスは、次の①～④を繰り返していきます。

①課題の設定……具体的な問題などを通じて課題を定し課題意識をもつ
②情報の収集……必要な情報を取り出したり
③整理・分析……分析していくことで思考する
④まとめ・表現……まとめや表現する

分析していくことで思考する
まとめや表現する

分析していくことで思考する
まとめや表現する

【探究】の土台となる学力

小・中学生の間に身につけて

【探究】のプロセスに、②「情報の収集」がありますが、「情報」は「知識」と置き換えられます。

小・中学校で学ぶ教科特に5教科は、これまでの人類の営みの中で発見・解明された事実や、今、世の中でき起きている事象を読み解くための土台となる「知識・技能」を学ぶものです。文系・理系といった枠を取り払い、横断的・融合的に、さまざまの知識を幅広くふれてほしいと思いません。

③の「整理・分析」は今までの学びです。

はなかつ「思考力・判断力・表現力」につながる部分です。たとえば、子どもがあるゲームをどうしてもほしい、と言ったとします。「なぜ、そのゲームがほしいの?」という親の問い合わせに、子どもが「なぜなら……だから」と、根拠となる情報を筋道立てて示しながら親を説得する。こんなやりとりが基礎的なトレーニングになります。

小・中学校のうちから「探究」型の学びを積み重ねていくことが将来の選択肢を広げる、ということをぜひ意識しておいていただきたいですね。

探査の見方・考え方を鍛かせ、横断的・総合的な学習を行なうことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を見出し解決していくための資質・能力を育成することを目指す。領では次のように目標が示されています。

大学入試で「総合型選抜」や「学校推薦型選抜」つまり、十分な「知識・技能」はもちろん、「主体性・多様性・協働性」を兼ね備え、自分だけでなく他人のため、世の中のため、ミッションを持って自ら探究し続けていく。このような「総合型選抜」や「学校推薦型選抜」が増えているのです。

つまり、「知識・技能」はもちろん、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」を兼ね備え、自分だけでなく他人のため、世の中のため、ミッションを持って自ら探究し続けていく。このような「総合型選抜」や「学校推薦型選抜」が増えているのです。

【探究】型の人材を求めているから



Q&A 探究型の学力を伸ばすには？ 石川さんに聞きました

Q. なぜ、「探究」がクローズアップされているの？

A. 人工知能（AI）は、膨大なデータ（情報）の収集や、言わされたことを言われたとおりにやる単純作業は得意です。つまり、正解が決まっているものに対しては、正しく速くたどり着けるわけです。

しかし、今、私たち人間が直面しているのは、新型コロナのような感染症、温暖化による気候変動、世界的な食糧難など、正解がわからない地球規模の課題で、AIでも正解は出せません。子どもたちは、将来どのような職業に就こうとも、このような予測不能な未知の状況に対応することになります。

正解がわからぬ課題に立ち向かうために、「探究」の力をつけておく必要があるのです。



Q. 5教科すべての力が必要なのですか？

A. 小・中学生で学ぶ、国語・算数・数学・英語は、論理的思考力のトレーニングが多い科目です。国語や英語では、論理的に書かれた説明文・論述文を読み解きながら、論理的に「読む」「書く」「話す」「聞く」を学びます。算数・数学は、論理的に物事が成り立つことを、式数やグラフなどで表します。理科や社会では、さまざまな事象の因果関係を知識として学び、さらに「(理科の実験)なぜこうなるのか?」とか、「(社会の歴史)どうしてこういう事件が起きたのか?」など、「なぜ?」という問い合わせを想起しながら学んでいきます。

つまり、国語、算数・数学、英語で身についた論理的思考力・表現力に、理科や社会の知識を肉付けし、結びつける。こんな横断的・融合的なイメージが、これから求められる学力です。だから5教科の力が大切なのです。

Q. 親は子どもにどう接すればいい？

A. 子どもが大きくなるにつれ、「なぜ?」「どうして?」のやりとりが面倒になり、子どもも親もあまり言わなくなる傾向があります。しかし、論理的な思考力・表現力を高めるためには、「What?」「Why?」「How?」の問い合わせは欠かせません。

子どもが何かをやりたいというとき、「何がしたいの?」「なぜやりたいの?」「どうやってやるの?」という問い合わせで、段取りや方法を確認してあげてください。それがトレーニングになり、「思考力・判断力・表現力」の原石になるからです。

そして、「What?」「Why?」「How?」の問い合わせに的確に答えるためには、必ず「知識」が必要になります。難しいことを知っているから偉い、というわけではありませんが、「知識」を持っていればいるだけ世界が広がります。親子で「なぜ?」のやりとりを心がけて。